

Title	2024年度大会参加記①：会報研究が開く歴史実践をめぐる対話
Sub Title	2024年度 "満洲記憶" 研究会参加記①：会報研究开展中关于历史实践的对话 Summary report of the 2024 Annual Meeting 1 : dialogue on historical practice sparked by bulletin research
Author	清水, 亮(Shimizu, Ryō)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2024
Jtitle	満洲の記憶 No.10 (2024. 12) ,p.208- 213
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20241200-0208

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2024 年度大会参加記①

会報研究が開く歴史実践をめぐる対話

清水亮

1 シンポジウムの概要

2024 年 10 月 28 日東洋大学の白山キャンパスで開かれた 2024 年度の大会シンポジウム「会報研究が開く歴史実践の可能性—『戦争のかけらを集めて』×『戦後日本の満洲記憶』—」に登壇させていただいた。当初佐藤量さんからいただいた依頼は、拙著『「予科練」戦友会の社会学——戦争の記憶のかたち』（新曜社、2022 年）を念頭においた講演だった。しかし、ちょうど 6 月に清水亮・白岩伸也・角田燎編『戦争のかけらを集めて——遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践』（図書出版みぎわ、2024 年）が刊行され、同じく若手研究者が中心となって会報を重要資料としている佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020 年）とのタイアップが叶った。

当日参加者は 30 名程度。4 時間もあったにもかかわらず、議論が充実する余り、フロアに集っていた『戦後日本の満洲記憶』執筆者の方々のコメントをいただく時間が足りなかったくらいだ。その後の懇親会でもさまざまな

会話・対話が生まれた。ちなみに、双方が事前に双方の編著の読書会を開いていたことも、議論の充実に資したに違いない。

当日の発表・コメントのタイトルと氏名は下記の通りである。

- ・「文字の声を聴く——会報から始まる歴史実践」(清水亮)
- ・「等身大の憲兵とつながる——会報分析を通した憲兵研究の成果とこれから」(後藤杏)
- ・「〈忘却－抵抗〉——満洲記憶への眼差し」(菅野智博)
- ・「『戦争のかけらを集めて』に対するコメント」(吉田裕)
- ・「会報をめぐる歴史実践の開放性と複数性——『戦後日本の満洲記憶』を読んで」(白岩伸也)
- ・「コメント」(飯倉江里衣)

2 発表内容の素描

以下では、あくまで私の視点から全体を顧みる。

発表者の清水・後藤杏・菅野智博に通底していた論点の一つは、当初はわざわざ研究しよう／継承しようとは積極的に思えないような「危険な歴史」が詰まった史資料にもあえて向き合い、解読を試みる模索であったと思う。

清水は、大石茜「青少年義勇軍の記憶——会報を賭した継承と変容」と『「予科練」戦友会の社会学』の会報分析を比較しつつ、「〇〇精神」「〇〇魂」という、現在の視点から見れば戦前の精神論の継続にみえる言葉にあえて向き合うことで、見出していったものを整理した。同窓会的集団や同時代社会の文脈を踏まえて、語りの背後にある戦後のナラティティに対して各々の解釈を提示していく会報分析の可能性を示した。

後藤も、「暴力的」や「悪玉」イメージの強調によって「理解のしがたい他者」として憲兵を位置づける社会通念が、かえって彼らの加害性を他人事にってしまう恐れに注意を促していた。憲兵の会報を紐解けば、加害へ向き合う議論も一時的に浮上していた。しかし、結局は退潮していく。その複雑な過程に、元憲兵の屈折した戦後の歩みが垣間みえた。

菅野も、満洲関連団体の会報群と出会ったときは、ノスタルジアや美化に満ちた文章をみて「けしからん」と思ったのが、率直な第一印象だったという旨を口頭で述べていた。しかし、やがて、そのような語りをしなければなかった背景や戦後の歩みについて考察することで、会報を史料として活用していく可能性を見出していく経緯を語っていた。

よくいわれるように、史料は、それ自体に本質的に何かの価値が備わっているというよりも、現在を生きる主体が、特定の視座から光を当てることによって価値をもつ。そして総じて、会報に現れるような、ノスタルジアやナショナリズムに容易に回収されてしまいかねない記憶に対して、野放しはせずに、研究者なりの仕方では受け止めて、内在的な理解と醒めた批判を織り交ぜた歴史記述を模索する意味を考えさせられた。

3 時間的距離と歴史実践——吉田裕コメントへの応答

発表に続く、コメントも強く心に残った（コメンテーター白岩伸也による大会参加記②も参照）。私なりに議論を振り返ってみよう。

吉田裕は、戦友会研究としての定義や地方支部に関する的確な批判を経たうえで、なぜ戦後の歴史に関心が集中してしまうのか、問うた。記憶研究だとしても、戦前の歴史に対する多面的な実証的分析が必要だという点には、私自身も強く賛同する。戦前は歴史学で、戦後は社会学というような「分業意識」を持っているわけではなくて、たとえば拙著『「軍都」を生きる——霞ヶ浦の生活史 1919-1968』（岩波書店、2023年）でも、史学の専門的なトレーニングを受けていない能力的限界をしばしば痛感させられた。そこは二次文献——もちろん吉田裕の諸著作——からの学びをいかに活かしていけるかが問われている。

それ以上に印象的だったのは、吉田が、「誤解や勘繰りかもしれない」と留保しつつも、「執筆者たちの若さを考えると、そして戦後という時代の長さ（来年は「戦後80年」）を考えると自分が体験していない「遠い」時代のことは自分事として感じるのがむずかしい」のかもしれないと述べ、「戦

前の歴史と自分との関係性」を書き込む必要を示唆したことだ。

たしかに、少なくとも私個人の感覚では、戦前や一五年戦争が「遠い」時代である。「自分事ではない」地点から研究を始めたことを、率直に認めざるを得ない。しかし、それは全く他人事であることとも違う（そうなら研究しようと思わない）。

「自分事ではない」距離の隔たりを出発点にしながらも、距離を縮め接点を探していく過程が、私の研究の道のりだった。その際に、戦前という物事の発端から始めるよりも、地続きの戦後をさかのぼっていくほうが体感的にしっくりくる、といえるのかもしれない。

とはいえ、どちらから進むかという違いはあれども、「戦後」の厚みを見失ってしまうことだけは避けたいという点は、共通しているはずだ。逆にいえば、井上義和が分析した特攻の自己啓発的受容のように（『未来の戦死に向き合うためのノート』創元社、2019年）、自己と戦死者を同一化してしまうような歴史との距離の在り方（あるいは歴史という距離の不在）には私も強い違和感を抱く。

この点は、吉田から「率直に言って「歴史実践」という概念を私は未だに理解できていない」と言われてしまったことにもかかわる。説明不足を補うとすれば、本書七頁で「多様な過去の痕跡を収集し分析し組み合わせて、歴史を叙述する、終わりなき共同作業」と定義した歴史実践という言葉をわざわざ強調する核にある可能性は、現在を生きる主体が過去を探求し表現していくプロセスに注目を促す力である。

それは、「自分事ではない」地点から始まる距離の隔たりから、何かの契機や偶然も含めて、距離をつめていく過程である。そのような主体の動きを含み込んだ歴史叙述の在り方が、時間的距離が遠くなるなかで、ますます必要になるのではないか。

もちろん、本書に収録された論考の多くは、歴史実践を具現化したものではないという指摘を重ねていただければ、編者の力不足を反省するほかない。それでも、本全体としては、一人一ページを費やすプロフィール記述や、冗

長なあとがきも含めて、各主体が集まった歴史実践のプロセスをどうにか可視化しようとした実践ではあった。これを今後いかに洗練させていくかは、私個人の課題として、もう一度考えねばならない。

4 継承対象との出会い——飯倉江里衣コメントへの応答

もう一人、飯倉江里衣のコメントも、二つの編著の特徴の比較、参与観察などの方法を背景にした過度な当事者の記憶の尊重（言い換えれば対象者との距離の近さ）に対する懸念、会報分析の可能性と限界において「書き残すことのできる条件」がキーポイントとなるという指摘など、学びの多い批判や論点提起に満ちていた。

そして、「何」を継承すべきと考えているのか、その中身があいまいで漠然」という率直な感想もいただいた。これだけは、ささやかな弁解を試みたい。継承すべき「何か」が先に決まっていて、それを受け取りに行くような継承の在り方は、本編著のいうところの体験継承の「バトンリレー」モデルに基づく認識である（もちろんその方式が現在なお重要であることは間違いない）。

一方で、本書がオルタナティブとして提案した、歴史実践に基づく「環礁モデル」は、主体の関心に従って探究し、思うように行かない状況にふりまわされながら、継承したいと思う「何か」と偶然に出会っていく過程、そして出会った何かの価値を対話や議論を通して捉えていく過程に重きをおく。そのため、「何か」という客体を全体的にアプリアリに決めてしまうことは、歴史実践という過程重視・主体重視の概念が開く可能性を狭めてしまう恐れゆえに、どうしても慎重にならざるをえない。

たとえば『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（御茶の水書房、2004年）によって歴史実践という言葉を広めた保莉実を例にとろう。もちろん彼は、「ジミーじいさん」による、「ケネディ大統領」が来たという語りに、フィールドワーク開始前には会おうとは予想もしていない。まして、それを“継承”しようとして遥々オース

トラリアへ赴いたわけでもない。さらにいえば、保莉は書籍を通してジミーじいさんの語る歴史を日本の読者に伝えようとはしているが、自ら継承しているとは言い切らない。「ギャップ越しのコミュニケーション」と呼ぶような絶妙な距離感がそこにある。

「何か」は、それぞれが現場から個別具体的に見つけていくものである。古びたカビくさい会報を一枚一枚めくりながら出会う。そして読み解く主体の側が、その断片に継承する価値を発見したり付与していく。

言い換えれば、「危険な歴史」が書かれた文書は、最初から価値が保証されている「バトン」にはならない。しかし、解釈をめぐる議論や対話が生起する場としての「環礁」を立ち上げることには資するはずだ（本書「エビログ」）。さまざまな限界やゆがみをもつ会報は、戦争を伝える便利な道具となるからではなく、私たちが議論し合う契機となるからこそ可能性がある。

言葉も思考もまだまだ足りていない忸怩たる思いを抱えながらも、このたびの先達との議論は励みになるものでした。登壇者の皆様、司会の佐藤量・大石茜様、会場運営の山本一生様に、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。懇親会含め、長丁場の歴史実践に加わっていただいた全ての方々に感謝と、今後の交流・対話の継続希望をお伝えします。